

## 〔特別展 復古大和絵師 為恭展にちなんで〕

## 岡田為恭筆「拾集古器図冊」について

岡田為恭の古典への憧れは絵画だけでなくとどまりません。王朝世界の面影をとどめた古い器物や調度類を写すことも絵師の使命と考えていました。為恭が終生、師と仰いだ天台宗の高僧、願海の記録には、為恭が古画、古文書、殿舎、宮宅、日用調度具に及ぶ画集、「類従古図」の編纂を志していたことが記されています。願海は為恭が既に著していた「古図管見抄」五十巻、「偽画考」一卷を目にして、「実二人間一部ノ書ト云フベシ」と絶賛しています。残念ながら、現在、この書は所在がわかりませんが、為恭の熱心な古画研究は、数多くの古画の模本によって示されています。「光格天皇策命使絵巻」(東京国立博物館)は、為恭が天保十二年(1841)に、前年に崩御した光格天皇へ諡号を贈る策命使の一行を描いた作品です。「第二部古實類従公事」と記された題箋から、「類従古図」と同じ志によって、復興された行事の記録であることがわかります。為恭はこの年に十九才です。この他にも、為恭が古画や器物を写し描いた冊子が残されています。

「拾集古器図冊」(大和文華館)もその一つです。この冊子には、縦28.3センチ、横22.5センチの紙が33

丁綴られています。表紙の中央と左下に「拾集古図」、「恭蔵」と墨書され、「拾集古図」の墨書の下と右下に「水荃家典籍印」、「水荃」と「鏡屋之印」の印が捺されています。これらは国学者、水荃磐樟の蔵書印です。水荃磐樟の父、水荃玉葉は有職故実詳しく、蔵書家として知られていました。水荃玉葉と改名する以前は丘守人と名乗り、丘守人宛の為恭書状が数多く残されることから、為恭の親しい友人であったことがわかります。

おそらく、「恭蔵」の「恭」が著者を示すのでしょうか。為恭かどうかは検討の余地が残りますが、為恭作品と関連する多くの図が認められ、為恭の周辺でまとめられたことは間違いありません。この冊子には、正倉院をはじめ、春日大社、石清水八幡宮など、近畿の寺社仏閣を中心に調査した武器、調度、鏡、染織などを写生的に描いています。拓本など、冊子に貼り込まれた小紙片には「細川」の割印があり、細川という人物によってこのように整理されたことがわかります。この冊子が現状にいたるまでには、いくつかの経緯があったことが予想されますが、明らかに為恭による記載も認められます。

13丁の裏と14丁の表を合わせた見開きには、畳んだ扇のような形状の硯箱が描かれ、次のように注記されています。「此硯箱は予か極めてめでたるものなり。漆匠のよく古へもののおほへたるか云し鎌倉時代と申すべきと。けにも文永正応の比の時代なるへし。松くい鶴の立るさまも天下一とかけける文字もいとなつかしうこそあるなり。藤原為恭」。この記載によって、この硯箱が為恭の愛用品であり、為恭の鑑定では、鎌倉時代の作品と認めていたことがわかります。立鶴と「天下一」の文字の意匠に「いとなつかしうこそあるなり」と記す感想には、為恭の古物に惹かれる愛着の念が表れています。為恭は実際に写生した器物をよく作品に描いていますが、この硯箱は、天保十四年、為恭が21才の作品である「年中行事図巻」(細見美術館)の三月の曲水宴を描く場面に見られます。

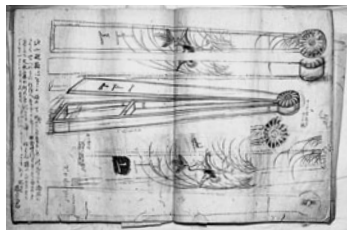
硯箱は正面、側面、そして半ば開いた全体の姿の三図に描き分けられ、さらに、文様を展開して正面から見た図と裏面の二図を貼り付けています。要の部分の拓本から等身大の図とわかり、側面と全体の姿を描く図では、胡粉で訂正を加えて丁寧に描いています。しかし、この図は為恭が描いたわけではありません。全体の姿を描く図の左下に記された「門生恭義写之」の落款から、為恭の門人、恭義が描き、為恭が注記を記したと考えられます。表紙の「恭蔵」の署名も、為恭ではなく、この恭義を指す可能性があります。

ます。

「法然上人像」(奈良県立美術館)の表裏裏面には、為恭の墨書があり、そこに「門生源恭儀藤原永言等をひきいて吉水の寺なる円光大師勅修絵詞の元本をもて写し奉ること三本、また一本」と「源恭儀」の名が見えます。おそらく、源恭儀と恭義は同一人物と思われる。為恭は「法然上人絵伝」の模写を、弘化三年、24才の夏から始めていますので、恭義は為恭の若い頃からの高弟と言えます。願海が嘉永七年(1854)に刊行した『尊勝陀羅尼明驗録』には、為恭が恭義に描かせた「仁和寺尊勝塔図」の挿図があり、恭義は器物の写生に優れていたと思われる。

この冊子には、恭義の落款がある図が数点含まれ、その中に嘉永六年(1833)十一月二十六日に、梅尾春日住吉社の木彫の神馬を描いた図があります。書込から胴の横幅が二尺四寸すなわち約73cmとわかります。これほどの大きさですと、もはや西洋画のデッサンに近づいています。おそらく、為恭もこの神馬を知っていたと思われます。為恭が「安政七年庚申三月十二日」に金刀比羅宮に奉納した「駒迎図絵馬」の馬の表現には、ずんぐりとした姿や、豊かな量感に神馬図と共通した特色が認められます。為恭がこの神馬図を参考にして「駒迎図絵馬」を描いたとすると、古器類だけでなく、生きた馬の表現にまで、写生図が絵画表現に生かされていることとなります。(中部義隆)

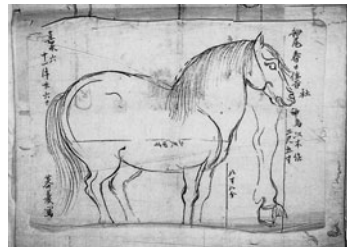
拾集古器図冊 硯箱図



年中行事図巻(部分・三月)細見美術館蔵



拾集古器図冊 神馬図



駒迎図絵馬 金刀比羅宮蔵



季刊 美のたより No.152

平成17年10月 8 日

発行 大和文華館